

美濃縞について

江戸時代の中頃、明和年間（1764年～）京都西陣から^{さんどめじまおり}棧留縞織の技術が伝わった。天明年間（1781年～）には、京都仏光寺通り西ノ洞院の火災により、そこに居住していた機業者が、美濃に移住して^{かんだいじんしま}管大臣縞（寛大寺縞）を織り出した。この2種の縞木綿のうち棧留縞は、明和から天保にかけ約60年間、この地方を代表する産物であった。さらに、文政頃（1818年）^{ゆうきしま}結城縞が織り出され、天保末年から次第に棧留縞に変わって、主製品となるに及んだ。棧留縞は木綿であるのに、結城縞は絹綿交織で、製織上からも棧留縞より高い技術が必要とされた。これらの縞木綿は、「美濃縞」と一括して呼ばれていた。

◇分野 博物館 069、中部地方：東山・東海地方 215、日本 291、社会教育 379、繊維工学 586、手芸 594

詳しく知りたい

タイトル・著者・出版者・出版年	場所	請求記号	資料番号
『羽島市史 第3巻』 羽島市史編纂委員会／編集 羽島市役所 1971 ＊美濃縞のおこり P.207～209、美濃縞の生産 P.209～215、美濃縞と藩統制 P.215～217、美濃縞の販路 P.217～221	開架郷土	A215	011067691 ほか
『竹鼻の歴史 図説』 竹鼻町史編集委員会／編集 竹鼻町史刊行委員会 1999 ＊美濃縞のおこり P.65、美濃縞の生産 P.66、美濃縞の販路 P.67、機織唄 P.250	開架郷土	A215	011145422 ほか
『美濃織物史』 美濃織物史編纂委員会／編集 美濃織物史編纂委員会 1960 ＊美濃織物の起源 P.1～2、美濃縞の由来 P.3～17、美濃縞の勃興 P.19～39	郷土	A586	010532307
『羽島・南濃の歴史 図説』 田中育治／著 郷土出版社 1988 ＊美濃縞と機業 P.124	郷土	A215	011024429 ほか
『郷土史壇 第3・4巻』 岐阜新聞社／編集 岐阜新聞社 1970	郷土	A215	010591519

『竹鼻織物工業協同組合六十周年・毛織会館竣工記念誌』 記念誌編輯委員会／編集 竹鼻織物工業協同組合・岐阜県毛織 1958 ＊織物の概要 P.1～6	開架 郷土	A586	012713467 ほか
『南濃 羽島市』 羽島市学校教育研究会社会科学研究部／編集 羽島市学校教育研究会社会科学研究部 1957 ＊織物の歴史 P.140～145	郷土	A215	011681806 ほか
『町制施行六十周年記念 竹ヶ鼻』 武藤重造／編集 竹ヶ鼻町役場 1931 ＊工業 P.11	郷土	A215	010609618
『笠松町史 上巻』 笠松町史編纂委員会／編集 笠松町公民館 1956 ＊美濃縞 P.651～671	郷土	A215	010589141 ほか
『ふるさと笠松』 ふるさと笠松編纂委員会／編集 笠松町 1983 ＊美濃縞 P.225～227、尾張領や加納領の棧留縞 P.227～229、笠松付近の織屋 P.229～230	郷土	A215	010593028 ほか

参考となる図書

『古代美濃あしぎぬとその後』 美濃あしぎぬ調査研究会／編集 岐阜県農政部園芸特産課 1999 ＊美濃縞のいろいろ P.39～40	郷土	A215	011148251
『「手づくりで伝統織物をつくろう」の実践記録』 羽島市立中央公民館／編集 羽島市教育委員会 1995	郷土	A379	011057353 ほか
『木綿伝承（手紡ぎ手織り入門）』 佐貫尹・佐貫美奈子／著 染織と生活社 1997	開架	A594	011133907
『木綿伝承 続（先人に学ぶ手わざと心）』 佐貫尹・佐貫美奈子／著 染織と生活社 2009	開架	A594	012381448
『尾張のもめん（そのルーツを求めて）』 一宮市博物館／編集 一宮市博物館 1989	郷土	A069	010594521

羽島の繊維関係年表

『織物のふるさと 美濃羽島繊維関係年表』 並河晴夫／編者 2010	郷土	A586	012387445 ほか
--------------------------------------	----	------	-----------------

※詳しいことは、カウンターでお尋ねください。